

## はじめに

神戸の都心・ウォーターフロントは、緑豊かな六甲の山々を背にし、穏やかな瀬戸内の碧い海を目前に有する類まれな美しい港町であり、山上や海上からのまちの夜景も、目にすれば忘れ難く印象的です。開港以来、物だけでなく、人や情報、さまざまな文化が行き交う我が国の玄関口としての役割を果たしてきており、異人館、洋菓子など現在のハイカラな神戸ブランドも歴史ある港町ならではのものです。



しかし、近年のコンテナ船の大型化に伴う港湾物流の変革に対応すべく物流活動の場がポートアイランドや六甲アイランドなど沖合へと移った結果、かつての沿岸のウォーターフロントのあり方が問われており、これは海外でも主要な港が共通してもつ課題でもあります。神戸が都市間競争に負けない選ばれる都市として持続的に発展していくためには、この都心・ウォーターフロントを如何に神戸型の魅力・活力あるまちに再生できるかが重要な課題となっています。

現在は、人口が減少する傾向にあり、また個人の消費志向をはじめ価値観が多様化し、一方でグローバルに経済や人が動く中で、大量消費社会・効率化優先社会から人々の心のあり方や豊かさが重視される時代へ移行しつつあります。

この時代の動きをふまえ、都心・ウォーターフロントでは、本市の創造都市戦略「デザイン都市・神戸」を具現化するリーディングエリアとして、人を中心とした新たな意味での“港都”を創生していきます。

そこでは、緑に満ちた美しいまちの景観や、知性・感性を豊かにし、文化性が高く、活動的な生活環境が提供されており、かつ、それらが身近に港を感じられる開放性の中に存在している—そのような環境の中で職・住・学・遊などさまざまな面でクリエイティブな活動が展開するまちをめざしていきます。

「港都 神戸」グランドデザインは、このような都心・ウォーターフロントをめざして、概ね 20～30 年後の将来構想を描いたものであり、平成 21 年の都心・ウォーターフロント研究会からの提言や第 5 次神戸市基本計画（神戸づくりの指針、神戸 2015 ビジョン）の策定における審議をふまえ、さらに、平成 22 年度の「港都 神戸」グランドデザイン検討委員会での検討等を経て策定するものです。

既に、都心・ウォーターフロントに関しては、眺望景観に関するルールづくりや旧神戸生糸検査所の（仮称）デザイン・クリエイティブセンター-KOBE への転活用など「港都 神戸」をめざした取り組みは一部で始まっていますが、景観ひとつを捉まえても容易にわかるように、まちづくりは一朝一夕にはできません。都心・ウォーターフロントに関わる市民・大学等・事業者・行政が、共有するまちづくりの目標を掲げ、ともに協力して長期間にわたり継続的に取り組む—“協創”の取り組みによって、はじめて実現するものです。

今後はこの協創による取り組みを推し進め、都心・ウォーターフロントが、市民の誇りとなり、魅力・活力に満ちあふれる「港都 神戸」となることをめざしていきます。

平成 23 年 3 月

神戸市長 矢田 立郎